

序章 一政治を時間のなかにおく

0. 本書の目的
 - ①多種多様な時間的過程の区分
 - ②異なる過程を生じやすい状況の特定 ⇒「歴史の重要性」
 - ③時間的次元の重要性の確認
1. 2つの研究例
 - カーペンター：要因の長期にわたる一連の配列に着目し、PA理論に基づく政官関係を批判
 - アートマン：国家建設の過程の違いが国家構造の永続的な違いをもたらす
 - ※単なる記述の終わるのではなく理論構築の作業が必要
2. 社会科学の「歴史への転回」
 - 社会過程の時間的次元を主に実証的資料の情報源として利用
 - 社会科学における歴史への転換
 - ①過去に関する研究として歴史
 - ②事例の素材探しとしての歴史
 - ③さらに多くの事例を得るための歴史
 - ⇒いずれも「経験」、「方法論」的な転換であり「理論」的なものではない
 - 時間的経過の観察の長所
 - ①メカニズムの発見
 - ②新たな仮説の構築
 - ③既存の理論の新たな方向への拡張
3. 分析の基盤
 - 経路依存が重要である理由
 - ①多くの社会過程に経路依存が生じる
 - ②配列・タイミングが社会現象の決定要因
 - ③多くの重要な社会的原因・帰結は緩慢に推移
 - ④制度の帰結は制度選択より発展が重要

第1章 一正のフィードバックと経路依存

0. 正のフィードバックの特徴
 - ①予測不可能性 ②硬直性 ③非エルゴード性 ④経路の潜在的な非効率性
 - 政治発展論と経路依存性
 - ①タイミングと配列のパターンの違いが重要
 - ②同様の条件で始まっても多様な結果が生じうる
 - ③相対的に小さい事象が大きな帰結を生じさせる
 - ④特定の措置が続けられると、事実上、覆すことが不可能
 - ⑤重大局面によって政治発展が区切られる
 - 正のフィードバックの力学
 - ①ある社会的文脈において選択を覆すコストは時間の経過とともに増加
 - ②タイミングの配列に注目
 - 正のフィードバックが生じやすい環境
 - ①集合行為の問題が存在
 - ②変更が困難な公式制度が中心的な役割
 - ③権力の非対称性
 - ④多くの政治過程・帰結が非常の多義的
1. 経路依存の正のフィードバック
 - 経路依存性：正のフィードバックを伴う動的過程
 - ⇒不可逆的分岐点として歴史／方向転換の困難さを内在する発展的過程

2. 「収穫逡増」と経済学における経路依存論

科学技術の発展から見られる収穫逡増

- ①ある技術の当初の優勢が正のフィードバックによってロック・イン
- ②アクターは一つの選択肢のみに執着するインセンティブを持つ
- ③その選択肢から続けられる経路へ進み続ける

収穫逡増を生じさせる文脈

- ①高い固定費用
- ②学習効果
- ③調整効果
- ④適応期待

経済学と経路依存性の例

- ①立地条件が産業発達に正のフィードバックを生じさせる
- ②研究開発の革新が他分野に利用され、生産性の劇的な増加

制度と経路依存性

- ①社会的相互依存が複雑な文脈において新しい制度は高い初期費用を必要
- ②個々の組織・制度のマイクロレベルにおいて、これらの配置に見られる経路依存性
- ③高い修復不可能性

3. 経済から政治へ

政治の場における正のフィードバックの**発生**要因

- ①政治の集合的性質：集合行為による高い適応期待と初期費用が自己強化の力学を生じさせ、現状維持の傾向（例）凍結理論
- ②制度の稠密さ：制度の密度↑ → 進路変更の費用↑
- ③権力の非対称性：権力を持つ者は自分の権力を増幅するために制度に影響（格差の拡大）
- ④複雑さと不透明性：政治の多義性による学習の困難さのため政治認識に焦点
しかし、社会で共有される認識の発展には高い初期費用と学習効果

正のフィードバックの**強化**要因

- ①時間的射程の短さ：アクターの近視眼的性向のため長期的費用・便益が経路に与える影響は限定的
- ②政治制度の現状維持バイアス：後継者もしくは自分を拘束しようとする選好

4. 経路依存と政治学

自己強化過程の働く状況での政治現象

- ①複数均衡
- ②偶発性
- ③タイミングと配列の重要性
- ④慣性

経路依存理論で政治を分析する時の理論的意義

- ①配列の重要性の確認
- ②相当の時間的射程を取り込んだ分析の必要性の確認
- ③機能主義の見直し

留意点

- ①叙述に終えず、メカニズムの特定に注意を払う
- ②偶発的・決定論的なものでなく相対的な開放期における選択が、その後において相対的な安定期へ導く

第2章 ータイミングと配列

1. タイミングと結合

2つの事象が同一の歴史的瞬間に起こる時、時間差によって異なる結果が現れる。
(結合) (タイミング)

2. 合理的選択分析における歴史的配列

合理的選択方法と歴史的配列：選択し検討の順序によって決定が決まる事など、順序がなぜ重要か示す事は出来るが、順序の種類が限られる。

合理的選択理論（特にゲーム理論）の限界

- ①利得・選好については語らない
- ②対象にならぬアクターの種類に限られる
- ③単純性のために少ないアクターと選択肢のみを用いる
- ④配列の中断が出来ない

⇒合理的選択方法で時間的順序を重視する研究の全領域をカバーする事は不可能であり、特定の「構成単位」の構築に利用すべき

3. 経路依存論における配列

「配列」の3つの扱い方

- ①正のフィードバック・ループの特定：特定の事象が「結合」する事のみに注目
- ②自己強化の配列論：特定の事象が起こるタイミングに着目
- ③下流の力学：重大局面から離れている「下流」によって初期の重大局面から生み出された自己強化過程が影響を受ける事に着目

4. 配列論の固有の特徴

- ①政治空間の充満：限られた政治空間におけるアクターたちの権力や資源の配置に着目し、その相対的な優劣によって結果は異なる
- ②社会的容量の発展：社会的営みに利用できる資源の増加に着目
⇒特定の時間における利用可能な資源の違いがアクターの選択に影響